

## 「ふるさと夢未来講演会」の開催 ～「思うは招く」 夢があればなんでもできる～

11月1日に大田市内県立高等学校支援連携協議会の魅力化に係る事業の一環として「ふるさと夢未来講演会」が邇摩高校を会場に開催されました。中学生と高校生が自分の未来社会の実現に向け、夢を実現した実践者の話を聞き、お互いの感想や未来への夢を語り合う場をもつことで、「夢を持つこと」「夢実現に向かって努力すること」の大切さについて学ぶことが目的です。本校生徒以外に大田三中、志学中の生徒の皆さんには直接会場に来ていただき、また市内の小学校4校にはリモートで参加していただきました。

今回講師にお招きしたのは、北海道に本社を置く株式会社植松電機の代表植松努先生です。植松電機は、リサイクル用マグネット事業で9割のシェアを誇る会社ですが、一方で北海道大学と共同でロケット開発を始め、宇宙開発分野で次々と実績を上げてきました。ロケット開発は植松氏の幼少期からの夢で、多くの困難を乗り越え夢をかなえた植松氏の人生は、小説『下町ロケット』のようであるともいわれ、注目を浴びてきました。そして、今回『「思うは招く」～夢があればなんでもできる～』と題して講演していただきました。

植松氏の講演を聞き、私は生徒たちに夢を持って欲しい、そして将来にわたってその夢を持ち続け夢を叶えられる人生を送って欲しい、と願いました。中学生、高校生の時に、将来何をしたいのか、どうなりたいかいろいろ思いをめぐらして、思い描いた夢がいつか叶えられたら素敵だと思えます。

植松氏の場合は、それがロケットだったということです。中学生の時、教師から夢を聞かれ、「ロケットや飛行機を造りたい」と答えて、「どうせ無理だから。現実を見ろ」といわれたやりとりがあったようですが、「どうせ無理」という言葉は我々教師が生徒に発してはいけない言葉だと改めて認識しました。

生徒の皆さんも自分自身で「どうせ無理」と思いこみ、夢をあきらめている人はいませんか。本校のキャッチフレーズは「かなえられる夢がきっとここにある」です。本校は、地域と連携して様々な体験学習を行っています。これらの経験や成功体験がやればできるという自信につながり、夢に向かって諦めずにチャレンジして行ってほしいと願っています。

植松氏は、お母さんから思ったらそうなるという意味の「思うは招く」という言葉を教えてもらい、思い続け夢を叶えてこられました。「どうせ無理」という言葉を「だったらこうしてみたら？」に変えることで夢は叶うと植松氏から教わりました。

「どうせ無理」という言葉は、人のやる気や可能性を奪います。興味を持たなくなり、やる前に諦め、考えなくなってしまいます。一方、「だったらこうしてみたら？」という言葉は、人の可能性を広げます。やったことが無いことに挑戦し、あきらめず、より良くを求めるようになります。

教師だけでなく、友達同士の会話でもお互いに夢を話し、お互いに「だったらこうしてみたら？」って言いあえたら全員の夢が叶います。

本校でもぜひみんなで「だったらこうしてみたら？」をはやらしていきたいと思えます。

講演が終わってから、今回お世話になった大田市教育委員会武田教育長様、株式会社n e c c o（ねっこ）代表取締役梶谷様と一緒に記念写真を撮らせていただきました。

